

核兵器廃絶を目指して

メアリー・ウイン・アシュフォード女史に聞く

「核戦争に反対し核兵器廃絶を求める医師・医学者のつどい」の招きで、第11回「つどい」集会（2000.10/21～22・大阪）の講師として来日した、IPPNW（核戦争防止国際医師会議）共同会長のアシュフォード女史に、集会の主催者を代表して、松井和夫保団連理事がインタビューを行った。

Mary-Wynne Ashford, MD

IPPNW 共同会長

1981年 カルガリーで医学博士。

1982年 ビクトリアホスピスで末期患者ケア専門医認定。

1997年 サイモン・フレーザーで博士号。

メアリー・ウイン・アシュフォード博士は、医師、教育家。ビクトリアで家庭医・ホスピス医師として11年間務めたのち、博士号取得のため大学に戻り、暴力予防計画を調査する。ビクトリア大学で助教授として5年間勤めた。

1984年以来、核軍縮運動に積極的にかかわってきた。現在、核戦争防止国際医師会議（IPPNW）共同議長。1991～93年までIPPNW副議長、1988～90年までIPPNWカナダ支部議長。

1988年にIPPNWノーベル賞特使としてフランスに派遣され、3カ月間、フランス支部で活動。

アシュフォード博士は、1988年、国連軍縮特別会議カナダ対外局顧問を務め、1987年のゴルパチョフ主催の核兵器のない世界フォーラムで基調演説をおこなった。作家でもあり、また、ヨーロッパ、ロシア、日本、インド、パキスタン、オーストラリア、米国、カナダで英語とフランス語で軍縮問題の講演をおこなってきた。カナダ連邦125周年記念総督章、サイモン・フレーザー大学の権威あるガンジー賞をはじめ数多くの賞を受賞。

IPPNW副議長としてIPPNW代表団の団長を務め、米国、ロシア、インド、パキスタンおよび北朝鮮の政府指導者と会見した。近著に、V・サイデルおよびB・レビ共著の『戦争と公衆衛生』の女性と戦争にかんする章、『Medicine, Conflict and Survival』誌の2000年7～9月号16巻第3号の「セルビアおよびコソボ爆撃の民間人への影響」がある。俳優マイケル・ダグラスら著名人も参加した国民啓蒙計画「核兵器はいらない」の提唱者

IPPNW | 727 Massachusetts Ave. | Cambridge, MA 02139 USA

<http://www.ippnw.org/>

+617-868-5050 |+617-868-2560 (fax)|

e-mail:ippnwbos@ippnw.org

聞き手 松井和夫

非核・平和民主主義担当部部长
保団連理事

* 核廃絶運動へのきっかけ

松井 まず最初に核廃絶運動に入られたきっかけは何でしょうか。

アシュフォード 1984年当時、私は全然核廃絶などに興味はありませんでした。ある晩、夫が産婦人科医で出産に立ち会うべく夜出かけていました。子供たちもいませんでした。私は家に1人でありまして、ドクター・ヘレンのスピーチか何かの番組を見ていました。そのときには「ああ、素晴らしいことをおっしゃっているな。とてもいいことだ」と思ったのですけれども、私自身は「彼女がそうやってくれたらうれしいけれども、私は巻き込まれたくないわ」ぐらいにしか思っていなかったのです。ただ、彼女がテレビで言っていたことを聞いて、何かとても興奮していました。夜中の3時ごろに夫が帰ってまいりまして、赤ちゃんの出産に立ち会ってうれしいと、とても興奮して話をしました。でも私は先ほどのドクターの話聞いてとても興奮していたものですから、彼の横で一晩中眠れませんでした。

次の日何事もなく仕事に行きました。また次の日仕事に行ったのですけれども、夜やはり眠れなかったのです。それで次の朝に、家族みんながいる前で私が感じていることを話しました。「やはりどうしても核廃絶のことに



メアリー・ウィン・アシュフォード女史



松井和夫非核・平和民主主義担当部部长

加わっていかなければならない」と。いままでは私には関係ない、私のやっていることと核廃絶の運動と関係があるとは思わなかったのだけれども、今後はやっていかなければならないと宣言したわけです。私がそれをやることによって家族にどういう影響を与えるかということは、そのときは全然分からなかったのですが、とりあえず私はやりたいと思ったらやるのだということで、家族の前で決意を表明いたしました。

* 決意を強めた「夫の告白」

夫は、私の2番目の夫なのですが、私は彼が若いころイギリス海軍軍医だったことは知っていました。でも知らなかったことがありました。彼はクリスマス島で原子爆弾の核実験があったとき、それにオブザーバシップといってそこを監視する船に乗って立ち会っていたのです。そのときとても恐ろしくて、頭の奥から消えない、心の奥底にあって、いつもついて回る恐怖のようなものがずっとあったと彼はそのとき初めて私に告白したのです。3人の子供がいましたが、私の決意を聞いて「家のことはおれが面倒みるから核廃絶運動を一生懸命やってくれ」と言ってくれ

ました。

当時12学年だった私の息子が「お母さん、そろそろ核兵器廃絶運動を始めるときだよ」と言ったのです。「僕の部屋にポスターが貼ってあるのを見たことがある？」と聞くので「あと思うわ」と答えたら、「じゃあちょっと見てみて」と言われてもう1度確かめましたら、そこにはロックグループがたくさん出ていまして、「核兵器反対」というスローガンの書かれたポスターだったのです。そこにはU2とかピンクフロイドとか、いろいろなグループが載っている、そういうポスターを彼は自分の部屋に貼っていた。だから彼は核のことをとても心配していたのに、私は全然気が付かなかったのです。

* 若い世代の恐怖心

松井 なぜ息子さんは核のことを心配していたのですか。

アシュフォード 84年というのは大変な暗黒時代というか冷戦の真ただ中でした。テレビなどでも核兵器の危険等をたくさん報道していたわけです。医学に携わっている学生さんたちも、とても核兵器のことを心配していました。

若い人に関して興味深い事例を紹介しましょう。

ある日、夫の勤める病院に15歳ぐらいの若い女の子がお腹が痛いと言って来ました。彼女にいろいろなことを聞いてみたら、ボーイフレンドのこと、学校のこと、家族のこといろいろなことを心配していて、いろいろな悩みがあるというふうな話でした。ストレスから来ているのかもしれませんが。

彼女を診察した医師が、「いままで核兵器のことを心配したことがあるか」と聞いたら、彼女は突然涙をポロポロポロと流し出して、「今までそういうことを考えたことはなかった」と。彼女はそのときから核廃絶運動にかかわるようになり、とても力のある唱道者になっていきました。それと同時に、いままであったお腹の痛みというのがなくなってきたということで、面白い話だと思うのですが。

『月刊保団連』は医学雑誌なので、もちろん、彼は、ちゃんとした内科的な検診をやった上でそういうふうにしたわけですよ(笑)。それは彼の名誉のために申し上げておきます。

松井 活動を決意されたときにはIPPNWを御存じだったのですか。

アシュフォード 不思議なことに、私が核兵器廃絶運動にかかわろうとする前に、IPPNWのカナダ支部に既に参加していたのです。カナダ支部から「こういう催しに参加してみませんか」と案内の手紙が来て、「これはいいことだ」と考えて入会のサインもしていました。しかし、そういうふうになっていること、頭で分かっていることと、実際にその運動にかかわることは全然違うということです。これはそのいい例だと思えます。だから既にIPPNWのことは知りながらも、その運動

に直接積極的に携わろうとは全然思わなかったわけです。

* 初めての沖縄の印象

松井 沖縄へ行って基地を見られたときの最初の印象はどうでしたか。

アシュフォード 何と申し上げたらいいか……。言葉を選ぶのに迷ってしまうのですが、大変嫌な気分で、胸が悪くなるような、そして怒りに満ちて、とてもとても悲しく感じました。と言いますのも、沖縄というのはとてもきれいな島で、パラダイスです。それなのに車で基地を見て行きますときに、両側がずっとフェンスになってしまっていて、ずっときれいな風景が見えない。こういうきれいな島にどうしてこういうフェンスがあるのか。

そしてまた一国が自分の国から離れたところに基地を持って、それを使うという中央のやり方、これはもう悪魔としか言いようがないと感じました。

松井 平和記念公園をお訪ねになったと思うのですが、その平和の礎^{イシジ}のところ、G8の沖縄サミットに参加する前のビル・クリントンは、「沖縄戦が人々に対して戦争を憎む気持ちを教えた」と言いました。「戦争を憎み、戦争を起こさず、戦争を防ぐためには、この基地が必要である」と言った。沖縄では命^{スエ}どう宝——Life is treasure」と言いますが、その宝である命を守るためには、こういう基地が必要だと。基地があることを歓迎すべきである、というようなことを言った、というのですが信じられますか？

アシュフォード これにはお腹の底からうんざり、げんなりします。英語では「double think——二重思考」と言うのですけれども、

例えばミサイルは平和を守るものである、平和維持軍であると言うのです。これは全く間違った考えです。

松井 日本の政府が、そのクリントンの演説を歓迎したというところがまた面白いところなのですが。

アシュフォード 日本の政府にああしろこうしろということは、私にはできませんけれども、カナダ政府も似たり寄ったりと言いますか、アメリカがやる提案とか構想には、いつも歓迎します。実際、国家ミサイル防衛構想も、一応OKということで受け入れている。カナダ市民にもそういうことに対して反対する人もいますが、どちらかというと、やはりアメリカとずっと共存的に生きてきたものですから、「アメリカがすることをサポートしなければいけない」というような風潮が根底にあると思います。つまりカナダも日本も、アメリカに対して同じバックボーンを共有しているのではないかと思います。

* 米軍基地廃止は世界の利益

松井 でも、日本のほうがカナダよりももっと依存しているのではないですか。

アシュフォード 50年も前に戦争は終わったのだから、もうアメリカに追従する必要はないのではないですか。

松井 私もそう思います。沖縄では基地の問題が非常に大きいので、日本の他の場所に比べると反核、核廃絶運動に対する関心が低いように思います。逆に広島では核の問題が余りにも大きいので、米軍基地に対する関心が他の地域、特に沖縄などに比べると低いように思います。沖縄で何かそういうことは感じられましたか。

アシュフォード 確かに松井先生がおっしゃったことはあると思います。ただそういうことは、極めて適切というか、妥当だと思うのです。それぞれの地域が、それぞれの問題を抱えているわけですから、その問題に集中したほうがいいと思います。沖縄の場合は





基地ということが、のどもとに突き刺さった大変重要な問題ですよね。ですから、沖縄がもし基地の問題に集中して、米軍基地を追い出すことができたなら、それは世界的にも大変大きな利益になると思います。それはアメリカのいままでの行動パターンを、変えるきっかけになるかもしれない。そういう意味では、沖縄が基地を集中的にやるということは、とてもいいことだと思います。

広島は広島で、また核による大変な被害を受けましたから、核のことを中心にやるのも妥当だと思います。だからと言って広島の人が、全くもって沖縄の基地のことを忘れているとは思いません。沖縄が基地のことに集中すれば、最終的には核廃絶にもつながるのではないのでしょうか

松井 その核に対する認識の違いが、これまで沖縄に、医師の反核組織が出来なかった理由です。今回44人の医学生と60人の医師が集まったということに驚くと同時に、非常にうれしく思っています。

アシュフォード 少なくとも基地と核兵器について議論するきっかけになると思うので、大変よかったですと思います。

* 沖縄とスコットランド

松井 沖縄の人の生活などをどういうふうに感じられますか。

アシュフォード 沖縄の人は大変心温かくて、人々を受け入れてくれて、優しい方々というふうに感じました。特に沖縄の方々を見ていて、私のスコットランド出身の主人のことを思い出しました。

沖縄とスコットランドは、歴史的な共通性があるように思うのです。つまり、スコットランドはイングランドという政府、沖縄は日本というメインランドの政府によって、長い間上から圧力をかけられてきた。それでもなおかつ自分たちの特色を保ってきたという意味で、スコットランドと沖縄とは共通点があるように思いました。

* 北朝鮮の仲間と心通わせ

松井 沖縄の医学生さんたちとお話しになりましたか。

アシュフォード 1時間ほど交流をしまして、質疑応答が30分。その後は夕食に出かけたのですが、講演に来てくれていた学生の12~15人ぐらいが夕食のほうにも一緒に来てくれました。そこでさらにお話をしていたのですが、そのときに「3月になるか5月になるかわからないのだけれども、2001年開催が予定されているIPPNW北アジア大会(於・北朝鮮ピョンヤン)にぜひ参加してくださいませんか。北朝鮮の学生に会えますよ」と言ったら、「あんな国に行くなんてとんでもない、嫌です」という感じで体を後ろへ引いてしまいました(笑)。彼らは「朝鮮人の方々は、あまり日本人を好きではないのだ」と言いました

が、そこが問題点なのです。だからこそ行くべきだと、私は言ったのです。

なぜそこがポイントかという、肝心なのは、歴史だとか過去のいきさつを超えることだと思うのです。IPPNWのもともとの成り立ちを考えてみましても、アメリカのバーナード・ラウン、旧ソ連のエフゲニー・チャゾフ両元共同会長が、それぞれの歴史や文化の違いを超えて、互いに手を携えて始めたのですから。

横路謙次郎広島大学名誉教授が、7回ぐらいピョンヤンに行かれて、お医者さんと会ったりしているうちに、過去に日本人のやったことに対して、日本人を代表して謝りたいという気持ちに自然になったと聞きました。そういう自然に沸き起こってくる感情が大事なのではないかなと思います。

松井 彼らはアシュフォード先生がおっしゃったことを理解しましたか。

アシュフォード はい、してくれました。なぜ北朝鮮の方々と一緒に交流を持つべきかについて、私はいろいろなスライドをお見せして病院の状況などを知ってもらい、お話をしました。我々は、北朝鮮のお医者さんたちに手を差し伸べて「あなたたちは1人ではないのだ」ということを知らせることが重要だと思うのです。国の外にも、北朝鮮の方々のこと、ドクターのこと、住民の方々のことを心配している人がいて、支援は受けられるのだと。将来的に体制が変わって南北統一が実現すれば、さらにもっと国際的な支援が得られるのだということを知らせることが重要であるから、ぜひ行くべきだと言ったわけです。

* 被爆国医師の責務

松井 話題を変えます。日本の学生、あるいは若きドクターたちへの期待を一言。

アシュフォード 日本は唯一の被爆国として、世界的に見ても大変ユニークな立場にあります。ですから、日本の皆さんが何回も何回も繰り返して、同じメッセージを世界の人々に伝えることは、大変重要だと思うのです。つまり何十万人の人々が1つの爆弾で死ぬということは、どんな意味を持っているのか。そして、それを引き起こした爆弾をなくすことがどれだけ重要であるかを、日本が世界に対して発信していく義務があると思うのです。これはちょっと言いにくいのですが、被爆国としての立場からも、日本は国連において、それを言う力が大変あるはずなのに、あえて発言をしようとしません。これは大変残念なことだと思うのです。

具体的に、日本のお医者さんたちにやっていただきたいことは、私どもが頂戴した、お医者さんが書かれた本にあるように、広島原爆被爆を経験し、患者の治療にさまざまにかかわってこられた日本のお医者さんたちこそが、その後「核爆弾による人間に対する被害というものはこういうものである」と、科学的、医学的立場からの研究を続けていただいて、そういう情報を私どもにずっと流し続けていただくことが大変重要だと思います。

* 学問追究と平和運動を結合し

日本の若い医学生の方へのメッセージに关しては、彼らは「いろいろな実習もあるし、覚えなければいけないこともあるし、とても忙しい」と言いました。ですから学生として、

反核平和の活動に熱心にかかわるということは、時間的にもまた大変難しいのだと。

それともう一つ、何か心理的なものがありまして、医者になるための専門的な学習と、非核平和を求める運動とを二律背反的にとらえています。その2つのことを同時にやるのは、難しいと彼らは訴えていると思うのです。それは分かるのですが、私としては、何か自分が信じる理想とかそういうものがあつたら、勇気をもって両方に取り組んでいただきたいです。

* 日本文化の独自性を生かして

それと日本の文化という面から、この問題を考えてみますと、テレビなどを見せていただくと、日本の文化というのは、とても深いと思うのです。いろんな文化を取り入れて1つにまとめているというか、とてもクリエイティブで、すごく生き生きとした文化であると感じました。こういうクリエイティブなスピリットを、IPPNWの運動の中に持ち込んでほしい。このことは、どういう文化を背景に持った人でもだれでもできるというものではないと思うのです。日本のような文化を持っている、いろんなものを1つにして楽しいものを作り出す、そういうクリエイティブに富んだスピリットを、我々の運動に反映していただけることができれば、とても素晴らしいと思います。

松井 ただ、日本人は英語が不得意だということで、「eメールの交換がちょっと…」という方が多いので、これが少し問題かと思うのですが。

アシュフォード 英語がちょっと苦手だからeメールを書くのに戸惑うというのは分かり

ます。

英語のことが出てきたので申し上げたいエピソードがあります。コソボの爆撃がありましたが、あのときにとっても大きな変化が起こりました。と言いますのは、人々は英語ができなくても、コソボで起こったことに対してとても心を動かされた、あるいは怒りを感じた。そういうときに「どうしてもeメールを送らなくては」というような気持ちになったわけです。それで突然ラテンアメリカ、エルサルバドル、ニカラグア、ギリシャ、アフリカ、アジアと、もうあらゆるところからeメールが入って来ました。

ちょっと見れば「ああ、ひどい英語だな」と思うのですが、ドクターたちが英語が不得意なのにもかかわらず、伝えようとして書いてくれたメッセージに注目すれば、とても意義のあることだと思うのです。ですからコソボの爆撃のとき以来、私どもIPPNWは初めて民主的な大きな団体になれたような気がしました。

* eメールを送ってほしい

ですから、ぜひ日本の方々もeメールを送ってほしいです。もし何か分からないことがあったとしても「このへんが分からないから、もう1度説明してちょうだい」と言えば済むことですから。そうすれば、またもう1度書いて返すということが出来ますので、とても簡単だと思うのです。

松井 私自身も含めて、先生方みんなにやるように言いましょう(笑)

アシュフォード 今、イスラエルのカハーン先生と、ドイツのガッツスタイン先生の間で、eメールのやり取りなどがとても活発に行わ

れています。今起こっている中近東の問題なのですけれども、イスラエルのカハーン先生は「これはパレスチナが悪いのだ」ともちろんおっしゃいます。それからガッツスタイン先生は、「これはみんなが悪いのだと思う」と。そういう活発なやり取りが行われているということは、大変興味深いと思っています。松井 大阪で10月21、22日に開催されました、第11回「核戦争に反対し核兵器廃絶を求める医師・医学者のつどい」のミーティングはどうでしたか。

アシュフォード 大変素晴らしかったと思います。私はまず通訳を通して理解したのですが、いろんな資料が出ていました。その中には被爆者の訴訟のこともありました。大変素晴らしい資料だったと思いました。

それともう1つ。お医者様たちのエネルギーが、大変素晴らしいと思いました。彼ら



がやろうとしていること、こういうふうに活動しているのだという、そういうエネルギーなものをとても感じました。

これはどこの国でも見られるというものではなくて、例えばアメリカなどは、そういうエネルギーが感じられるところにまでは、まだ全然行っていません。少しエネルギーが始めつつあるかな、という感じだと思います。

東京から来られた目賀田説子さん、それから、大阪大学の黒沢満先生のお話が大変素晴らしかったと思います。そして松井先生も(笑)。

松井 本当ですか、ありがとうございます。お世辞がお上手ですね(笑)。

アシュフォード お世辞ではありません(笑)。

* 希望を持って楽天的・楽観的に

松井 最後に一言。今核廃絶運動にとって、一番重要なことは何でしょうか。

アシュフォード 一番大事なことは、望みを持つこと。それから楽観的に考えるということだと思います。私がいつもスピーチの原稿などを書くときに心していることは、今起こりつつあること、そして我々は勝利するのだということを、常に頭に置きながら、それを原稿に表すようにしています。

それは、私たちが今かかわっている問題は、大変重篤な重い問題だからです。それゆえに望みを持って、楽天的な考えで楽観的に物を見ていくことが必要だと思います。

松井 ちょうどお時間になりました。ありがとうございました。

アシュフォード (日本語で)ありがとうございました。

(2000年10月26日)